

引き際を上手に



吉岡 晶子

こどもたちが帰った後、静かになった保育室を片付けながら、その日の出来事を思い出して「また今日も中途半端なことをしてしまった」「あのけん

か、話は聞いたけど、どうもすつきりしなかった」「あのけんか、話は聞いたけど、どうもすつきりしなかった」

「あの件は結局どうなったのかしら」など反省することが次々に浮かび、私はいつもこうなんだから、忙しさについ中途半端なかかわりをしてしまうんだから、と自分のいたらなさを思うことがよくあります。反省すればいいというものでもないのに。

そんな私をホッとさせてくれる、肩がちよっと軽くなる出来事がありました。

「ウェーン、ウェーン」とままごとコーナーから泣き声が聞こえます。A子が両手で顔を覆いさめざめと泣いているのですが、近くにいてままごとをしているB子、C子、D子は、「どうしたの?」「泣かないで」でもなく自分の動きをしています。実は、A子は自分のいやだ、違う、という気持ちを「泣く」

という行為で意志表示することが殆どなので、また泣いた、と思ったのかも知れません。そうではあっても顔をおおう指の間からチラッチラッと私に訴える視線を投げかけてくるのですから、私はままごとの所に行きました。A子は「あのね、私ね、おねえさんがいいのにならしてくれないの」「そうなの、それで悲しかったの」と私が相づちを打つと、すかさずお料理をしていたB子は、「だってね、もうおねえさんは二人もいるの」と手を休めずに言います。A子が泣いていても知らん振りをしたのではなく、やはり気になっていたのでしょう。「そうなの、二人いるともうだめなの？」と聞くと、B子は



「うん、あと赤ちゃんなの」とお料理を続けながら言うのです。A子はまだメッメッしています。「おねえさんはもう二人もいるからあと赤ちゃんなんだって」と伝えると、A子は「でもおねえさんがいい」とまたウェーンと泣き始めました。ままごとでよく起こるトラブルです。私が行ってからはA子とB子はまともに顔を見合わせてはいません。私は、「そうなの」「こうなんだって」と間を取り持ちながら、赤ちゃん役が多いA子の気持ちを考えてB子になんとかならないか考えてもらおうか、B子のはっきりした態度にも何かあるのだろうしなどと頭の中で考えつつも、そこでは「どうしようねえ」としか言えませんでした。そうこうしているうちに私が誰かに呼ばれたのでしょうか（今となっては定かではないのが恥ずかしいところです）、その場を離れてしまいました。

少し経って保育室にもどり、ふとままごとコーナーを見ると、A子もB子もにこにこしてとても楽

しそうに遊んでいるではありませんか。「あら、良かった」「大丈夫だったのね。何とかなったんだ」とホッとしました。

このことをあとで考えてみて、私が途中でいなくなったことが、かえって息が止まってしまった二人の関係を切り替えて、新しい展開へと向かわせたのではないかと思っただけです。二人共、言いたいことには先生に伝えたいし、遊びは続けたいし、何とかならないか……と思い始めた頃で、タイミングが良かったのでしょうか。私がいまごろコーナーに行った時に、A子は先生が来てくれたと思いい、B子は先生が来てしまったと思ったかも知れません。相手に泣かれると立場が弱くなりますから。トラブルが起きた時、「先生が来る」ということは、あるメンバーにとっては強気になれることであり、あるメンバーにとっては弱気になってしまうこともあります。言いたいことが言えるようになったり、言いづらくなってしまうこともあるでしょう。いくら優しく穏やか

にしても「先生」の存在は大きく影響は大であることは否めません。

この時、私が双方の気持を聞いて何らかの解決に導いていたとしたら、それはそれで、治まったかも知れません。でもその場合には、先生に助けを求めたA子は、「先生が来て助けてくれた」という思いが残り、A子と私の間ではプラスの関係になるでしょう。B子はもしかしたら「A子ちゃんはいつも泣いちゃうし、先生がこう言ったから」という思いが残らないとも限りません。次に事が起きた時に、「さっき先生がそう言ってたじゃないの」ともなりかねません。たまたま私が「どうしようねえ」とだけ言い残し、二人に下駄を預けることになったこと



で、双方のやりとりがあつて解決し、二人の間では新しい道が開けたのではないでしょうか。結果として子どもたちに任せる部分があつたことで育ち合いにプラスになった気がします。

いつもああすれば良かったこうすれば良かったと反省の材料になる小さな出来事で、こんなことを思い巡らしました。

自分のかかわり方で、中途半端だったと反省することはあつても、「引き際」と意識したことはあまり無かつた気がします。この事例から考えるに、あるところまでかかわり、あとは子どもたちに任せることがあつても良いのではないか、むしろその方が



子どもたち同士の育ち合いに繋がるのではないかと思います。突き放すのではなく、考えたり悩んだり工夫したりする余裕を残したかかわりということですね。勿論最後まできちんとかかわることが必要な場合もありますし、入園してすぐというのでもなく、子どもたちの育ちに合わせて少しずつかかわり方を変化させていくということでしょう。任せた後は、日頃の先生のかかわり方、判断の仕方や動き方が表われることになり、自分を振りかえるチャンスになるかも知れません。

あるところで引いて任せることが中途半端の言い分けにならないようにし、ややもすると考えすぎて不自然になりがちな私、意識しすぎないように気をつけて、「引き際を上手に」をモットーに、育ちに繋がる引き際を模索してみます。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)